

アーティスト・イン・レジデンスつなぎ2024成果展 ホワン・ピンリン 黄品玲

さざめく波と木漏れ日：思いがとどまる場所

The concluding solo exhibition of Artist in Residence Tsunagi 2024

Huang Pin-Ling Whispering Waves and Dappled Sunlight: Where Thoughts Linger

 つなぎ美術館
TSUNAGI ART MUSEUM



アーティスト・イン・レジデンスつなぎ2024成果展 ホワン・ピンリン 黄品玲

さざめく波と木漏れ日：思いがとどまる場所

The concluding solo exhibition of Artist in Residence Tsunagi 2024

Huang Pin-Ling Whispering Waves and Dappled Sunlight: Where Thoughts Linger



はじめに

つなぎ美術館では、アートによる町づくりと地域ゆかりのコレクションの充実を図るため、2014年から地域交流プログラムと個展の開催、作品の収蔵をとまなうレジデンスプログラム「アーティスト・イン・レジデンスつなぎ」を実施しています。

「アーティスト・イン・レジデンスつなぎ」として初めて海外からアーティストを招聘するため、2019年に台湾にて調査を始めましたが、その翌年には新型コロナウイルス感染症の拡大により、延期を余儀なくされました。同感染症の拡大が収まったため、2023年に調査を再開し、1年あまりの準備期間を経て実現したのがホワン・ピンリンを招聘アーティストとする「アーティスト・イン・レジデンスつなぎ2024」です。調査と準備が中断しているあいだに、半導体受託生産の世界最大手、台湾積体回路製造（以下TSMC）の熊本市近郊への進出が決まり、2024年には操業が開始されました。TSMCの関係者を中心とする多くの台湾人が熊本に移り住み、人や物の往来が増加するなど経済活動を基軸とした交流が盛んになったことで、熊本の社会は大きく変わりつつあります。

8月から12月にかけて津奈木町に滞在したホワン・ピンリンは、人々と自然と交わりながら、新たな風景と出会ったときの最初の印象を温め、成果展「さざめく波と木漏れ日：思いがとどまる場所」では31点の新作を展示しました。津奈木町では、これからさらに身近になる台湾と熊本の文化面での交流をこれまでに培ったアートによる町づくりのノウハウを生かしながら深めていく予定です。

最後に「アーティスト・イン・レジデンスつなぎ2024」の実施にあたり、ご協力を賜りました関係各位に厚く御礼申し上げます。

つなぎ美術館主幹・学芸員 楠本智郎

Foreword

Since 2014, Tsunagi Art Museum has undertaken “Artist in Residence Tsunagi,” a residency program encompassing a community exchange program, solo exhibition, and artwork acquisitions, as a project to promote town development through art activities and build a collection rooted in the Tsunagi region.

In 2019, the Museum embarked on research in Taiwan in order to invite its first overseas artist to “Artist in Residence Tsunagi.” Unfortunately, the Covid-19 pandemic broke out the following year and research had to be postponed. Research was resumed in 2023 when the pandemic subsided, and after a little over a year of preparation, “Artist in Residence Tsunagi 2024” featuring Huang Pin-Ling as its invited artist found realization. In the period when research and preparation was suspended, the world’s largest contract semiconductor maker, the Taiwan Semiconductor Manufacturing Company (TSMC), announced its plan to build a plant near Kumamoto City. In 2024, the new plant went into operation. With the arrival of TSMC personnel and numerous other Taiwanese to live and work in Kumamoto, active exchange has transpired among people as economic activities have increased and people and commodities have come and gone. Kumamoto’s society is undergoing great change as a result.

During her August to December residency in Tsunagi, Huang Pin-Ling gave time to nursing her impressions of the landscapes she encountered here, while actively enjoying exchange with local people and nature. As a result, she exhibited 31 artworks in her concluding residency solo exhibition, “Whispering Waves and Dappled Sunlight: Where Thoughts Linger.” Tsunagi plans to apply the knowhow it has gained from using art in town development to fostering the cultural exchange between Taiwan and Kumamoto that will grow stronger henceforth.

We wish to extend our appreciation to everyone who has cooperated in the realization of the project, “Artist in Residence Tsunagi 2024.”

KUSUMOTO Tomoo, Chief Curator, Tsunagi Art Museum





忘れえぬ風景

田中 雅子

インディペンデントキュレーター

近年のホワン・ピンリン（黄品玲）の絵画を見ると、まず目を引くのはその清冽な色彩と、特徴的な筆触である。青と緑を基調とし、白、しばしばそこに僅かな暖色やメタリックな色を加えられ、緻密なタッチと大胆なストロークのコントラストによって抽象とも具象ともつかない風景が構成される。そこには、たしかに光と風とざわめきがあるように感じられ、強く惹きつけられる。どこか見覚えがあるような、自分が知っているような風景に思わせるが、具体的な場所や時間に着地しない。作者であるホワン自身も、実在する風景を再現しているわけではない。記憶の断片や、日々 SNS やブラウザを通して目にするイメージに触発されて、どこかで見たような／どこでもない「風景」を再構築している。ホワンが描きつづけている「風景」とはいったいなにか。

風景、それをここでは仮に「外界を知覚するためのひとつの見方」と定義しよう。すでに指摘されているように、風景という概念やその起源は、普遍的なものでも単線的な歴史を

辿れるものでもない。どの「風景」も、実際は無数に存在するなかの「ひとつの見方」でしかない。それは環境のように客観的な現象と、心象のような主観的な現象の相互作用によってかたち作られるため、いつ・誰が見出すかによって常に揺れ動くものだからだ。

とはいえ、現代の風景論の大部分は、近代西洋主義的な考え方が前提になっていると言って良いだろう。西洋ではルネサンス以降、遠近法に立脚した「風景画」や風景的なイメージの誕生と同時に「風景」という概念が生まれた。英語の landscape と仏語の paysage は、いずれも「風景」そのものと「風景画」の両方の意味を持つ。オスカー・ワイルドの「自然は芸術を模倣する」という言葉が示すように、現代の私たちが経験する「風景」は、無意識のうちに絵画や写真、映画／映像あるいはテキスト—現代であれば SNS 上のイメージ—から影響を受けている。

また、実際にある風景を見ている人が、かならずしもそ

Unforgettable Landscapes

TANAKA Masako

Independent Curator

On seeing Huang Pin-Ling’s recent paintings, what catches our eye is her clear, cool colors and distinctive brushstrokes. The paintings take blue and green as their dominant tones, with white and often a hint of warm or metallic color added, and through precise touches of the brush against bold, sweeping strokes, a landscape neither abstract nor representational is composed. Sensing the actual presence of light, wind, and the murmur and roar of sound in the paintings, we feel strongly attracted to them. They evoke landscapes we recall seeing somewhere or familiarly knew at one time but cannot remember when or where. The artist Huang herself does not seek to recreate an actual landscape. Provoked by fragments of memory or images seen in daily life on social media and browsers, she reconstructs “landscapes” seen somewhere / existing nowhere. Just what really are these “landscapes” that Huang continually paints?

Let us tentatively define landscape as “a way of seeing in order to perceive the external world.” As has been

established, the concept and origins of the landscape are neither universal nor traceable in a linear history. In reality, any “landscape” is only “one way of seeing” among countless others. This is because the landscape seen is shaped by the interworking of objective phenomena such as environment and subjective phenomena such as mental images, and hence always varies depending on who is doing the looking and when.

Be that as it may, we can safely say that discourse on the landscape is premised largely on modern Western thinking. The concept of “landscape” was born in the West after the Renaissance, along with the rise of perspective-based “landscape paintings” and landscape-like images. Both the English *landscape* and French *paysage* mean a “physical landscape” itself as well as a “landscape painting.” As Oscar Wilde said, “Nature imitates art,” and our experiences of landscapes today are unconsciously influenced by paintings, photographs, films/videos, texts and—in contemporary life—

の風景を知覚しているとは限らない。セザンヌによるサント＝ヴィクトワール山の観照を思い出してほしい。パリから郷里に戻ったセザンヌは、この山を幾度となく描いた。毎日のようにサント＝ヴィクトワール山を目にしているはずの地元の農夫たちに、いかにセザンヌがかの山への愛やその魅力を語ろうとも、彼らの反応は期待外れのものだった。さらに言えば、セザンヌ以前に、この景観に西洋絵画のパラダイムを大きく変えてしまうほどの、絵画的な可能性を見出したものはいなかった。セザンヌは、それまで事実としてあったにもかかわらず、誰も見ていなかった、いわばありふれた「風景」を、セザンヌがいうところの「感覚 (sensations) の実現」として絵画のなかに存在させたのである。

もっとも、重要なのはホワンが、津奈木町での滞在で、どのような「風景」を発見し、描いたのか、である。最初に描かれた連作《旧赤崎小学校のカイツカイブキ》、そして最後に完成した夜の不知火海に浮かぶ赤尾島を描いた《遠い光を通して：夜の島》には、きわめて具体的な主題が描かれている。つまり、冒頭で述べたような、これまでの匿名性の高い作品傾向とは明らかに異なる側面を見せている。この2作品のあいだに描かれた全作品を見ると、近年の彼女の作品に

共通する特徴は見られるものの、これらの具象的な作品が、津奈木での滞在制作を象徴する作品であることは間違いないだろう。

引き潮時にのみ陸続きになり渡ることができる赤尾島を描いた作品は、アーティストの五十嵐靖晃によって毎年行われているアートプロジェクト《海渡り》を、地元の住人たちとともに経験したことが契機となって描かれた。ホワンは、津奈木町での滞在制作について、次のように説明する。それまでの都市生活においては、風景は自身の記憶や内面を投影するひとつの表現方法だったが、津奈木では目の前に広がる、すでに完結しているように思える現実の風景に対して、絵画にできることはなにかを思案したという。本展で最も大きなサイズで描かれた本作品は、ホワンにとって津奈木の風景が、もはやたんなる憧憬や幻想の対象ではなく、今もむかしもこの地で生きる人々と、見知らぬ土地におけるホワン自身の暮らしとの、地続きの存在であったことを思い起こさせる。

風景画というよりも、むしろ4連の「ポートレート」のような存在感をもつ、《旧赤崎小学校のカイツカイブキ》はどうだろう。樹木単体の上部を切り取ったような構図、タイトルに固有名詞がつけられていること、いずれもホワンの作品では珍し

い。聞き慣れないこの木について調べてみると、大気汚染にも強い丈夫な針葉樹として、高度経済成長期の日本全国、主に学校、工場、道路などに大量に植栽されていた一つまり私たちが日常的に目にしているはずの一木だということがわかった。現在ではほとんど新たに植栽されることはなく、剪定されないまま放置され、大きくなりすぎたカイツカイブキは伐採される。ホワンが描いたカイツカイブキの枝葉のかたちは、まさにその大きくなりすぎたカイツカイブキの姿だ。小学校の建設時に植えられたとすれば1976年からずっと存在していたこの木に、どれだけの人が目を向けただろう。このカイツカイブキも、描かれた後に伐採された。しかし、その姿は、ホワン、そしてこの作品を見ている私の忘れえぬ風景として、永続的に生きつづけることになる。

一見静止しているように見える絵画だが、そこにはかならず時間の流れが存在する。絵画は時間を経験している、といっても良いかもしれない。写真と異なり、絵画は「現在」という一瞬をとどめることはできない。当然ながら、画家が風景を見出し、それをカンヴァス上に描くまでには、多かれ少なかれ時間が経過する。ホワンが日々描き溜めているドローイングは下絵というよりは、彼女にとって日記のような役割を果たしている。

それらは直接的かつ即興的であり、彼女がその瞬間に見たものの、感じたことをありのままに映し出している。ドローイングと比するならば、油絵を描くホワンは、その記憶の断片を時間をかけて深化させ、カンヴァス上のコンポジションを注意深く設定し、より象徴的な「風景」をカンヴァスに定着させていることがわかる。タイトルにある「思いがとどまる場所」とは、この場合、津奈木の風景でもあり、作品でもある。

ホワンの作品を見ているとき、私たちは絵画のメディウムに残された作家の身体的な痕跡を通して、彼女が感受した「風景」を経験し直している。それは、現実の津奈木の風景と土地に刻まれた記憶、そしてホワン自身の眼差しと経験が織り交わったものである。そのとき、記憶の深層にある忘れえぬ風景がふいに喚起される。誰も同じ「風景」を見ることはできないのだとすれば、描かれた風景もまた、鑑賞者それぞれの記憶や心情と重なり合い、見るたびに新たな意味を生み出すはずだ。未知の風景がとつぜん眼の前に開けるかのように、予期しない瞬間にみずからの生の断片があらわれる。ホワンが描きつづけているのは、そのような風景だと理解している。

by images on social media.

Moreover, a person looking at a certain landscape does not necessarily see it. Recall, if you will, Cézanne’s studies of Mont Sainte-Victoire. Cézanne painted this mountain countless times when returning to his hometown from Paris. No matter how he sought to describe his love for the mountain and the mountain’s charm to local farmers who presumably saw Mont Sainte-Victorie every day, their response was disappointing. What is more, no one before Cézanne had seen the pictorial potential of this landscape—a potential so great as to dramatically change the paradigm of Western painting. He discovered “landscapes” actually there that no one really looked at until then, thinking them common place, and captured them in paintings as the “realization of his sensations.”

Of importance here is what kind of “landscapes” did Huang discover and paint during her residency in Tsunagi? The multi-panel work she began by painting, *Trees in Front of the Old Akasaki Primary School*, and her final work depicting Ako Island in the Shiranui Sea at night, *Through a Distant Light: Islands in the Night*, concern very specific subjects. In this, they display an aspect clearly different from what we find, until then, in the highly anonymous works I mentioned at the outset. Looking at all the pieces she produced in

Tsunagi in the interval between them, we can safely say that these two representational works, while having features in common with her recent works, are symbolic of her residency in Tsunagi.

Her painting of Ako Island, which can only be reached by land at low tide, was inspired by her experience of “Umiwatari (Sea Crossing),” an annual art project conducted with local residents by artist Igarashi Yasuaki. Huang explains her residency art production in Tsunagi in the following way. In her life in urban surroundings, until then, landscapes were an expressive vehicle for projecting her own memories and thoughts. But in Tsunagi, where true landscapes—already complete as they are—spread before her, she pondered how she could respond to them in paintings. This work, the exhibition’s largest, reminds us that for Huang, Tsunagi’s landscapes could no longer simply be objects of admiration or fantasy. They were an extension of the people living here, now and in the past, and of her own life in an unaccustomed land.

What about *Trees in Front of the Old Akasaki Primary School*, a painting that is not so much a landscape as a four-panel “portrait”? The structure of its composition, which cuts out the upper portions of trees, and that of its title, which includes a proper noun, are both rare in Huang’s

work. On researching the Chinese junipers (*kaizukaibuki*) featured in the work, a tree unfamiliar to me, I learned it was planted in large numbers at schools, factories, and along roads throughout Japan as a hardy conifer resistant to air pollution, during the nation’s high economic growth period. It is, in other words, a tree we might expect to see every day. Nowadays, there are almost no new plantings of Chinese junipers, the trees are left unpruned, and they are cut down when overgrown. The shape of the branches of the Chinese junipers depicted by Huang is unmistakably that of overgrown trees of this species. If planted when the primary school was newly built, how many people can we imagine gazed at these trees, visible at the school since around 1976? These Chinese junipers were also cut down, after Huang painted them. They will nevertheless live on forever as an unforgettable landscape for Huang, and for me as one who has closely viewed the work.

The landscape paintings appear static at a glance, yet time inevitably flows in them. A painting, we can say, experiences time’s passage. Unlike photographs, paintings cannot freeze one moment in time. Needless to say, a small or large measure of time passes as the artist discovers a landscape and depicts it on the canvas. The drawings that Huang daily produces serve not so much as preparatory

sketches as a diary of her experience. The drawings are direct and impromptu, reflecting what she saw and felt at the moment. In sharp contrast to the drawings, Huang when painting in oils devotes time to deepening her fragments of memory and carefully planning her composition on the canvas so as to obtain a more symbolic “landscape” on it. In this case, the place “Where Thoughts Linger” referred to in the exhibition title is both the Tsunagi landscapes and the paintings themselves.

When we see a painting by Huang, we re-experience the “landscape” she saw and felt, through the physical traces she leaves in the painting medium. The landscape meeting our eyes interweaves actual Tsunagi scenery, past memory engraved on the land, and Huang’s own visual perceptions and experiences. At that moment, from the depths of our memory, an unforgettable landscape suddenly appears in mind. If indeed no one can see the same “landscape,” then the painted landscape too, in the same way, coincides with each individual viewer’s memories and emotional sentiments, and evokes new meaning with every encounter. At an unexpected moment, a fragment of our own life appears, like an unknown landscape suddenly opening before our eyes. In my understanding, this is the nature of the landscapes painted by Huang Pin-Ling.



島々の間に見る水のうねり
See Through the Islands

油彩・キャンバス
Oil on canvas
162×130cm



山と波、重なり合う景色
Mountains and Waves, Overlapped Scenery

油彩・キャンバス
Oil on canvas
130×162cm



旧赤崎小学校のカイツカイブキ-1
Trees in Front of the Old Akasaki Primary School -1

油彩・キャンバス
Oil on canvas
100×72.7cm

旧赤崎小学校のカイツカイブキ-2
Trees in Front of the Old Akasaki Primary School -2

油彩・キャンバス
Oil on canvas
130×97cm

旧赤崎小学校のカイツカイブキ-3
Trees in Front of the Old Akasaki Primary School -3

油彩・キャンバス
Oil on canvas
130×97cm

旧赤崎小学校のカイツカイブキ-4
Trees in Front of the Old Akasaki Primary School -4

油彩・キャンバス
Oil on canvas
100×72.7cm



陽光に染まる野
Fields of Light

油彩・キャンバス
Oil on canvas
130 × 194cm





印象の霧の中に佇む島
Island in a Mist of Impressions

油彩・キャンバス
Oil on canvas
24.2 × 41cm



海の向こうの景色
The Scenery Beyond the Sea

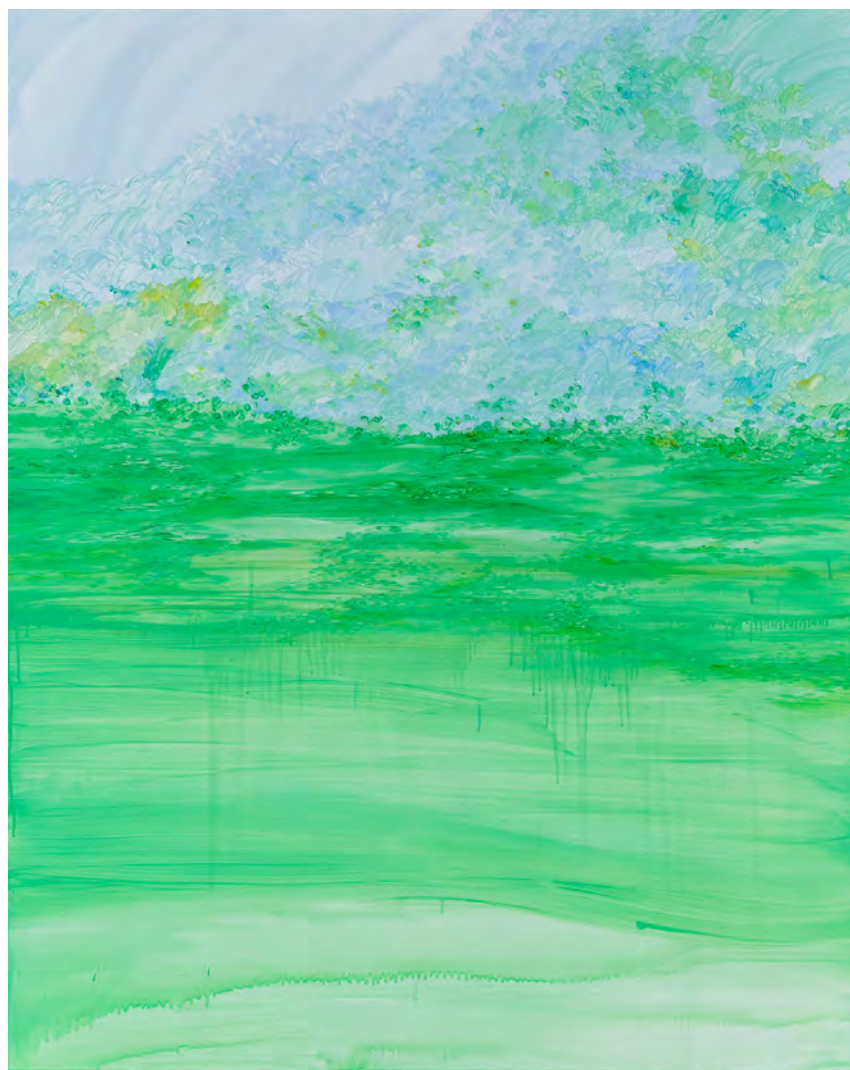
油彩・キャンバス
Oil on canvas
162 × 130cm



遠い光を通して：夜の島
Through a Distant Light: Islands in the Night
油彩・キャンバス
Oil on canvas
181.1 × 227.3cm







風渡る山、水面に寄せるささやき
Rustling Mountains and Rippling Waters

油彩・キャンバス
Oil on canvas
162×130cm



緑の海と穏やかな波
The Green Sea and Gentle Waves

油彩・キャンバス
Oil on canvas
162×130cm



思いと微風
Thoughts and the Gentle Breeze
油彩・キャンバス
Oil on canvas
162 × 130cm



思索の山
The Mountain of Thought
油彩・キャンバス
Oil on canvas
130 × 194cm





*



34-35p上段(左から)
 ドローイング・オブ・デイズ-2024/5/15
 Drawing of Days-2024/5/15

 ドローイング・オブ・デイズ-2024/9/6
 Drawing of Days-2024/9/6

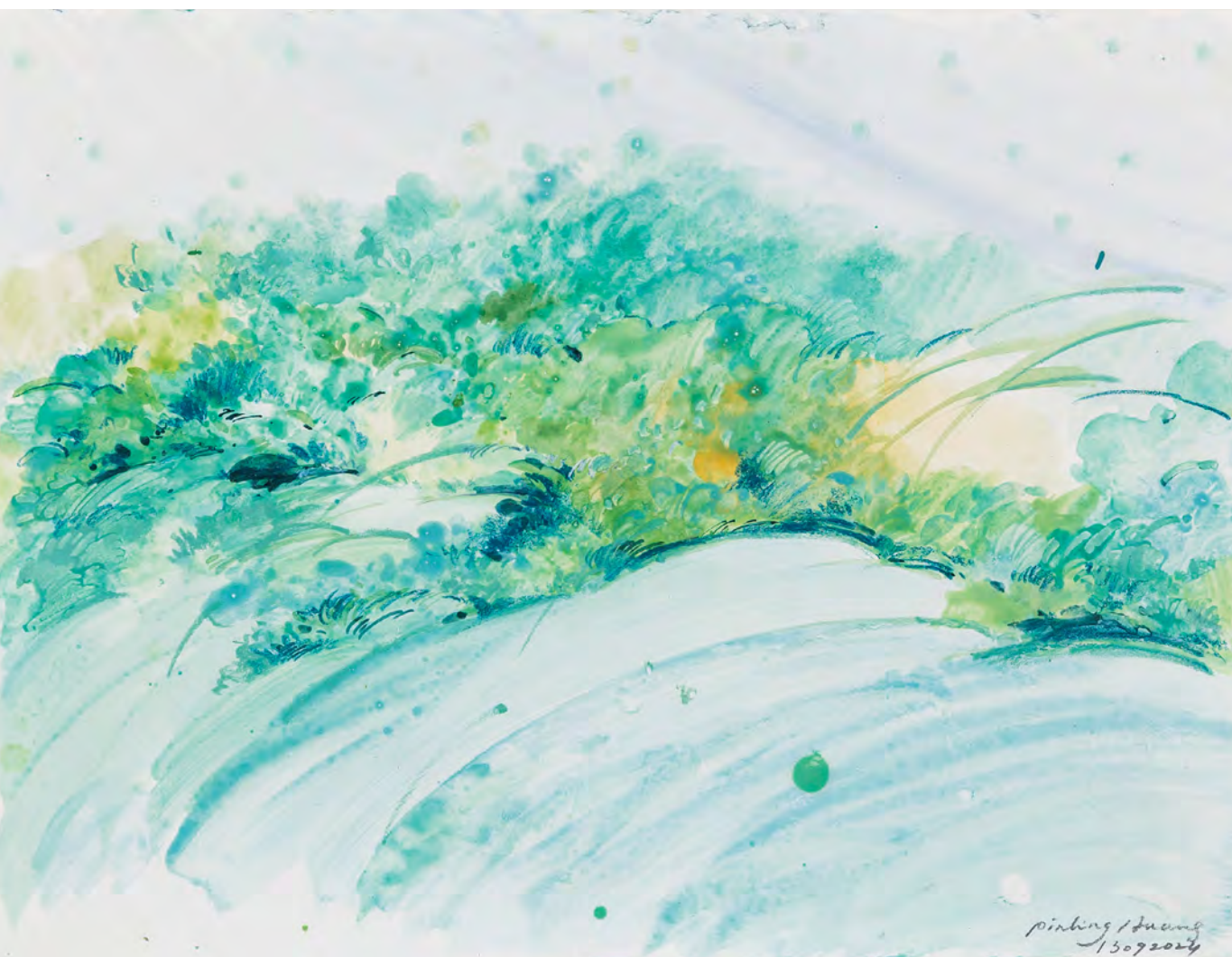
 ドローイング・オブ・デイズ-2024/9/6
 Drawing of Days-2024/9/6

34-35p下段(左から)
 ドローイング・オブ・デイズ-2024/9/6
 Drawing of Days-2024/9/6

 ドローイング・オブ・デイズ-2024/5/27
 Drawing of Days-2024/5/27

 ドローイング・オブ・デイズ-ある日2024
 Drawing of Days- someday in 2024

水彩・色鉛筆・紙
 Watercolor and color pencil on paper
 27.8×20.8cm * 20.8×27.8cm



36p

ドローイング・オブ・デイズ-2024/9/13

Drawing of Days-2024/9/13

37p

ドローイング・オブ・デイズ-2024/5/18

Drawing of Days-2024/5/18

水彩・色鉛筆・紙

Watercolor and color pencil on paper

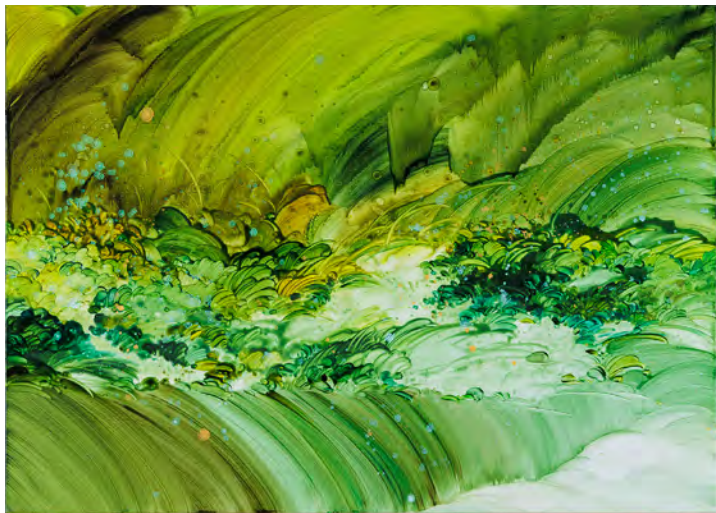
27.8×20.8cm * 20.8×27.8cm

*



6015





内なる風景 No.1
Inner Landscape No.1

油彩・キャンバス
Oil on canvas
65×91cm



内なる風景 No.2
Inner Landscape No.2

油彩・キャンバス
Oil on canvas
65×91cm



内なる風景 No.3
Inner Landscape No.3

油彩・キャンバス
Oil on canvas
65×91cm



山影に溶ける想い
Reflection of the Mountains

油彩・キャンバス
Oil on canvas
97×130cm





夏の蒸し暑い息吹
The Sultry Breath of Summer

油彩・キャンバス
Oil on canvas
53 × 53cm



海藻
Seaweed

油彩・キャンバス
Oil on canvas
27 × 22cm



昼間の夢見
The Daydream in the Daylight

油彩・キャンバス
Oil on canvas
130 × 97cm



星々が目覚めるとき
When the Stars Awaken
油彩・キャンバス
Oil on canvas
65 × 91cm



夜の赤崎島
Night at Akasaki Island
水彩・紙
Watercolor on paper
29.7 × 21cm



作品リスト

1階展示室	旧赤崎小学校のカイツカイブキ-4	緑の海と穏やかな波	3階展示室	ドローイング・オブ・デイズ-2024/5/18	山影に溶ける想い
	Trees in Front of the Old Akasaki Primary School -4	The Green Sea and Gentle Waves		Drawing of Days-2024/5/18	Reflection of the Mountains
	油彩・キャンバス	油彩・キャンバス		水彩・色鉛筆・紙	油彩・キャンバス
	Oil on canvas	Oil on canvas		Watercolor and color pencil on paper	Oil on canvas
	100×72.7cm 2024	162×130cm 2024		27.8×20.8cm 2024	97×130cm 2024
山と波、重なり合う景色	陽光に染まる野	思いと微風	ドローイング・オブ・デイズ-2024/5/15	ドローイング・オブ・デイズ-2024/9/6	夏の蒸し暑い息吹
Mountains and Waves, Overlapped Scenery	Fields of Light	Thoughts and the Gentle Breeze	Drawing of Days-2024/5/15	Drawing of Days-2024/9/6	The Sultry Breath of Summer
油彩・キャンバス	油彩・キャンバス	油彩・キャンバス	水彩・色鉛筆・紙	水彩・色鉛筆・紙	油彩・キャンバス
Oil on canvas	Oil on canvas	Oil on canvas	Watercolor and color pencil on paper	Watercolor and color pencil on paper	Oil on canvas
162×130cm 2024	130×194cm 2024	162×130cm 2024	27.8×20.8cm 2024	27.8×20.8cm 2024	53×53cm 2024
鳥々の間に見る水のうねり *	印象の霧の中に佇む島 *	思索の山	ドローイング・オブ・デイズ-2024/9/6	ドローイング・オブ・デイズ-2024/5/27	海藻
See Through the Islands	Island in a Mist of Impressions	The Mountain of Thought	Drawing of Days-2024/9/6	Drawing of Days-2024/5/27	Seaweed
油彩・キャンバス	油彩・キャンバス	油彩・キャンバス	水彩・色鉛筆・紙	水彩・色鉛筆・紙	油彩・キャンバス
Oil on canvas	Oil on canvas	Oil on canvas	Watercolor and color pencil on paper	Watercolor and color pencil on paper	Oil on canvas
162×130cm 2024	24.2×41cm 2024	130×97cm 2024	27.8×20.8cm 2024	27.8×20.8cm 2024	27×22cm 2024
旧赤崎小学校のカイツカイブキ-1	海の向こうの景色 *		ドローイング・オブ・デイズ-2024/9/6	内なる風景 No.1	昼間の夢見
Trees in Front of the Old Akasaki Primary School -1	The Scenery Beyond the Sea		Drawing of Days-2024/9/6	Inner Landscape No.1	The Daydream in the Daylight
油彩・キャンバス	油彩・キャンバス		水彩・色鉛筆・紙	油彩・キャンバス	油彩・キャンバス
Oil on canvas	Oil on canvas		Watercolor and color pencil on paper	Oil on canvas	Oil on canvas
100×72.7cm 2024	162×130cm 2024		20.8×27.8cm 2024	65×91cm 2024	130×97cm 2024
旧赤崎小学校のカイツカイブキ-2	遠い光を通して：夜の島 *		ドローイング・オブ・デイズ-2024/9/13	内なる風景 No.2	星々が目覚めるとき
Trees in Front of the Old Akasaki Primary School -2	Through a Distant Light: Islands in the Night		Drawing of Days-2024/9/13	Inner Landscape No.2	When the Stars Awaken
油彩・キャンバス	油彩・キャンバス		水彩・色鉛筆・紙	油彩・キャンバス	油彩・キャンバス
Oil on canvas	Oil on canvas		Watercolor and color pencil on paper	Oil on canvas	Oil on canvas
130×97cm 2024	181.1×227.3cm 2024		20.8×27.8cm 2024	65×91cm 2024	162×130cm 2024
旧赤崎小学校のカイツカイブキ-3	風渡る山、水面に寄せるささやき		ドローイング・オブ・デイズ-ある日2024	内なる風景 No.3	夜の赤崎島
Trees in Front of the Old Akasaki Primary School -3	Rustling Mountains and Rippling Waters		Drawing of Days- someday in 2024	Inner Landscape No.3	Night at Akasaki Island
油彩・キャンバス	油彩・キャンバス		水彩・色鉛筆・紙	油彩・キャンバス	水彩・紙
Oil on canvas	Oil on canvas		Watercolor and color pencil on paper	Oil on canvas	Watercolor on paper
130×97cm 2024	162×130cm 2024	* 印は成果展終了後につなぎ美術館が収蔵	27.8×20.8cm 2024	65×91cm 2024	29.7×21cm 2024

関連プログラム

- A

植物拓印ワークショップ

11月9日 グリーンゲイト広場
- B

手作り水彩ワークショップ マイパレットをつくろう

11月10日 グリーンゲイト2階
- C

オープニングトーク

12月7日 つなぎ美術館1階展示室

ホワン・ピンリン（画家）

田中雅子（インディペンデントキュレーター）

ゾエ・イエー（鳳甲美術館館長）
- D

津奈木中学校鑑賞授業

12月12日 つなぎ美術館1・3階展示室
- E

津奈木中学校出張授業

12月16日 津奈木中学校



動画



ホワン・ピンリン 黄品玲 略歴

Huang Pin-Ling

- 2014 エコールデボザール（パリ国立高等美術学校）大学院卒業
- 2009 国立台北芸術大学卒業

個展

- 2024 Draw me a poem of days / Gallery kasper（神奈川・日本）
- 2023 窓外風景 / nca | nichido contemporary art（東京・日本）
Sceneries on the ways / KGI BANK Dunnan Branch（台北・台湾）
- 2019 Unnamed Land / galerie nichido Taipei（台北・台湾）
Unknown Road / Kuandu Museum of Fine Arts（台北・台湾）
6 am. In a Bright Daylight / WinWin Art（高雄・台北）
- 2018 Deep Wind / Gai Art（台北・台湾）
- 2017 Dust of mind / nca | nichido contemporary art（東京・日本）
- 2015 D'ailleurs / Galerie Paris Horizon（パリ・フランス）
Inner Land / A Gallery（台北・台湾）
- 2014 Lonely Land / Beaux-Arts de Paris（パリ・フランス）
- 2013 A Piece of Peace / MU Gallery（プラハ・チェコ）
- 2009 My Home Is A Little Far / ZABU Coffee（台北・台湾）



グループ展

- 2024 夏の軽井沢日動画廊 / 日動画廊（長野・日本）
- 2023 50e ANIVERSAIRE DE LA GALERIE COMME À LA BELLE ÉPOQUE
- Paris, Tokyo, Rio, Taipei - / galerie nichido Paris（パリ・フランス）
“MEMORIES 02” selected by Tomio Koyama / CADAN有楽町（東京・日本）
Short Term Residency -短い交流- 2023 spring / 高架下スタジオ Site-Aギャラリー（神奈川・日本）
Natural Compositions / nca | nichido contemporary art（東京・日本）
- 2022 横浜草枕プロジェクトⅡ / 高架下スタジオ Site-Aギャラリー（神奈川・日本）
- 2021 Sound Talks: Local Soundscape Collecting Project / Hong-gah Museum,（台北・台湾）
SMALL / nca | nichido contemporary art（東京・日本）
- 2019 small is MORE - winter group show - / nca | nichido contemporary art（東京・日本）
SMALL WORKS: an endless journey / nca | nichido contemporary art（東京・日本）
- 2018 Winter Group Show / galerie nichido Taipei（台北・台湾）
Group Show of Taiwanese and Japanese artists / Galerie Pierre（台中・台湾）
- 2017 Small Scenes / nca | nichido contemporary art（東京・日本）
Very Period / VT Artsalon（台北・台湾）
- 2016 In the Other Place / Kalos Gallery（台北・台湾）
As Smaller as the Universe / galerie nichido Taipei（台北・台湾）
Play List / VT ArtSalon（台北・台湾）
Remaining Sceneries / galerie nichido Taipei（台北・台湾）
A Place of One's Own / JuMing Museum（台北・台湾）
- 2015 New Abstract Painting in Taiwan / JinLü Art（台北・台湾）
- 2014 What are we mapping / The Pier-2 Art center（高雄・台湾）
- 2013 Melting Potes! 2013 / Musee du Montparnasse（パリ・フランス）
The Islands of The Day Before / Kuandu Museum of Fine Arts（台北・台湾）
- 2010 Post-Adolescence / National Taiwan Museum of Fine Arts（台中・台湾）

さざめく波と木漏れ日：思いがとどまる場所

ホワン・ピンリン

初めて津奈木を訪れた時、私はこの大地が持つ光と影の美しさに深く心を奪われました。陽光が海面に降り注ぎ、波の輝きがきらめく中、岸辺に打ち寄せる波の音は、まるで自然が奏でる静謐な旋律のようでした。森の中へと歩けば、木漏れ日が風に揺れながら斑模様を描き、木々のざわめきとともに時間が一瞬止まったように感じられました。

津奈木の景色は単なる視覚的な美しさにとどまらず、大地の記憶や歴史、そしてこの土地で生きてきた人々が長年積み重ねてきた静けさと息遣いが空気に染み込んでいるようです。遠くの山々は朝霧に包まれ、雨上がりの草木が生き生きと息づく、この自然は自らのリズムで巡り続けています。この地に身を置くことで、自分の命もまたその調和の一部になったような感覚になりました。

これほど美しい環境は、私にとっては新たな挑戦でもありました。都市の生活では、風景画は自分の内面を投影する一つの表現方法でした。しかし、津奈木の美しい自然を目の前にした時、私は一時、創作の方向性を見失いました。それは、この風景そのものがすでに完結した美しさを持っていたためです。

その中で、絵を描くことは、ただ外見の形や色を捉えるだけではなく、それを通じて生活への記憶や感情を伝えることだと気づきました。そこで私はペースを落とし、この地での生活に溶け込むことを選びました。朝、鳥のさえずりや波の音、夕暮れ時の光と影の細かい変化、そして記憶が積み重なるにつれて、創作のインスピレーションが徐々に湧き上がってきました。

津奈木での記憶の断片

今回の展覧会では、津奈木での生活の中で残した記憶の断片を表現しています。波がきらめく水面、ゆっくりと寄せては返す波、雨上がりの山間に立ち昇る霧、夜の赤崎の島々、これらの景色は、私がこの土地と出会ったかけがえのない瞬間を作り上げました。

このような瞬間は単なる風景の記録ではなく、私の感覚と感情が織り交ざった断片です。潮風の香りと移り変わる空の色彩—こうした細かい感覚が、この土地とより深いつながりを生み出しました。私はこれらの作品を通じて、このような「つながり」を観る人に伝えたいと思っています。「さざめく波と木漏れ日」という言葉は、まさに私が津奈木で体験したすべてを象徴しています。自然の中で、私は平穏と調和を見つけ出し、新たな自分にも出会いました。この記憶が作品を通じて観る人の心に届き、何かの痕跡を残すことができれば、私にとってこれ以上の喜びはないと思っています。

移動しながら創作の基盤を探る

見知らぬ土地に身を置き、その土地のリズムに従って暮らすことは、私にとってリセットと自己を見つめ直す方法です。アーティスト・イン・レジデンスの経験はまさにその過程であり、環境の変化を通じて、自分の創作の方向性を再考し、新たな可能性を発掘する機会となります。

私は頻繁に引っ越す生活を送ってきました。大学以来、毎年住む場所を変えることが習慣となり、一番遠い引っ越しではバリへ留学することもありました。これらの経験から、異なる文化や言語、生活様式に素早く適応する能力を培いましたが、同時に疎外感への敏感さも深まりました。このような定住できない感覚は、私の創作の源となり、筆を通して人生の言葉にできない断片を捉えたいという願望を駆り立てています。

夏目漱石が『草枕』でこう書いています。

「住みにくさが極まると、住みやすい所へ行こうとする。移ることも住みにくいと悟った時、詩ができ、絵が生まれる……」

この言葉は私に深い啓発を与えてくれました。芸術は単なる自己表現ではなく、人生への応答でもあります。移ることのできない現実の中で、一人の芸術家として、作品を通して自身の短い命をより調和的で美しいものにしたいと考えています。

そのため、私は移動と新しい出発に対して特別な思いを持っています。毎回の移住は、私にとって生活と創作の再生です。新しい環境は常に私を未知の世界にいざない、創作の学び直しを促します。アーティスト・イン・レジデンスでの経験も同様です。最初は土地に不慣れな状態から始まり、徐々にリズムを見つけ、やがて創作に没頭できるようになりました。そうして、ようやくすべてに慣れた頃にレジデンスの期間は終わりを迎えます。このような循環こそが、私の作品に絶えず革新を与えてくれるのです。

自分の創作心境を振り返ると、作品はいつも記憶と思いを深く繋いでいます、そして風景という形でこれらの感性を具体化しています。

今回の展覧会では、津奈木での生活から得た記憶の一部を表現しています。私がこの土地と出会った証をこの作品を通じて、津奈木の静けさや美しさとともに伝えたいです。そして、この土地の温かさと生命力を観る人々にも感じていただけることを願っています。

Whispering Waves and Dappled Sunlight: Where Thoughts Linger

The first time I visited Tsunagi, I was deeply captivated by the beauty of its light and shadow. Sunlight poured into the sea's surface, making the waves shimmer, while the sound of the tide lapping against the shore sounded like a serene melody composed by nature itself. Walking into the forest, I watched as dappled sunlight swayed in the wind, casting shifting patterns, and, for a brief moment, time seemed to stand still amid the rustling trees.

The landscape of Tsunagi is not merely visually beautiful—it carries the memories and history of this land, infused with the quiet presence and breath of the people who have lived here for generations. Distant mountains are shrouded in morning mist, and after the rain, the grass and trees come alive with fresh vitality, continuing their cycles following their own rhythm. Immersing myself in this place, I felt as though my own existence had become part of that harmony.

Yet, for me, such a beautiful environment also posed a challenge. In urban life, landscape painting was a way to reflect my inner world. However, when faced with Tsunagi's breathtaking natural scenery, I momentarily lost my creative direction. The landscape itself already possessed a complete and undeniable beauty, making my brush feel almost redundant.

Amid this uncertainty, I came to realize something: painting is not just about capturing external forms and colors—it is about conveying memories and emotions through them. So, I chose to slow down and immerse myself in life here. As the days passed—listening to the birds and waves in the morning, observing the delicate shifts of light and shadow at dusk, and accumulating memories over time—inspiration gradually surfaced once again.

Fragments of Memory in Tsunagi

This exhibition presents fragments of memory I have gathered during my time in Tsunagi. The glimmering water, the slow ebb and flow of the waves, the mist rising in the mountains after the rain, and the small islets of Akasaki under the night sky—all these landscapes have shaped the irreplaceable moments of my encounter with this place.

These moments are more than just records of some scenery; they are interwoven with my senses and emotions. The scent of the sea breeze, the ever-changing hues of the sky—these subtle sensations deepened my connection with this land. Through my work, I hope to share this sense of "connection" with the viewers. The phrase "Whispering Waves and Dappled Sunlight" perfectly encapsulates everything I experienced in Tsunagi. In nature, I found tranquility and harmony, and I also discovered new aspects of

myself. If these memories, conveyed through my works, can leave a trace in the hearts of those who see them, that would bring me the greatest joy.

Seeking a Foundation for Creation Through Movement

Placing myself in an unfamiliar land and living according to its rhythm is my way of resetting and re-examining myself. The experience of an artist-in-residence is precisely that process—a chance to reconsider my creative direction and discover new possibilities through the new environment.

I have experienced frequent relocations throughout my life so far. Since university, moving to a new place each year became a habit, with my farthest move taking me to Paris for study. These experiences taught me to adapt quickly to different cultures, languages, and ways of life, yet they also heightened my sensitivity to feelings of displacement. This inability to settle has paradoxically become a source

of my creativity, fueling my desire to capture through my brush fragments of life that words cannot express.

Natsume Soseki wrote in *Grass Pillow*: "*And when its difficulties intensify, you find yourself longing to leave that world and dwell in some easier one— and then, when you understand at last that difficulties will fog you wherever you may live, this is when poetry and art are born.*"

This passage has profoundly influenced me. Art is not merely self-expression; it is also a response to life. In an inescapable reality, as an artist, I strive to make my brief existence more harmonious and beautiful through my work.

For this reason, I have a deep attachment to movement and new beginnings. Each relocation is a renewal of both my life and my artistic practice. A new environment constantly places me in the unknown, requiring me to relearn and rediscover my creative process. The artist-in-residence experience follows this same cycle—I start as a stranger to the land, gradually find my rhythm, and eventually become fully immersed in the creation process. Yet, just as I grow accustomed to everything, the residency comes to an end. But it is precisely this cycle that continuously brings new life into my work.

Looking back on my artistic journey, my works have always been deeply tied to memory and thought, materializing these sensations through landscapes. In this exhibition, I express fragments of memory drawn from my time in Tsunagi. Through these works, I hope to convey the quiet beauty of Tsunagi and to allow viewers to feel the warmth and vitality of this land.

Pinling Huang

アーティスト・イン・レジデンスつなぎ2024
ホワン・ピンリン 黄品玲
さざめく波と木漏れ日： 思いがとどまる場所

滞在期間 2024 年 8 月 26 日～ 12 月 22 日
展覧会期 2024 年 12 月 7 日～ 2025 年 2 月 24 日

企画・運営 楠本智郎（つなぎ美術館 主幹・学芸員）
運 営 櫻場啓子（津奈木町地域おこし協力隊）
 木下裕介（津奈木町地域おこし協力隊）
 西川久美子（津奈木町地域おこし協力隊）
企画協力 ゴエ・イェー 葉佳蓉（鳳甲美術館館長）

主 催 つなぎ美術館（津奈木町）

助 成  財団法人
 國家文化藝術基金會
 National Culture and Arts Foundation

記 録 集

編 集 楠本智郎 ホワン・ピンリン 石井克昌
執 筆 田中雅子 ホワン・ピンリン 楠本智郎
翻 訳 ブライアン・アムスタッツ（pp. 4, 7-9） 門脇悦美（p. 54）
写 真 [作品・会場・制作風景] 小田崎智裕
 [関連プログラム風景] つなぎ美術館
デザイン 石井克昌

発 行 つなぎ美術館
発 行 日 2025 年 3 月 10 日

The concluding solo exhibition of Artist in Residence Tsunagi 2024

Huang Pin-Ling Whispering Waves and Dappled Sunlight: Where Thoughts Linger

